

浪江の

こころ通信

● 第59号 ●



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第59号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





東京都

長橋 明孝さん(大堀)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：4月8日

大堀相馬焼への思いを胸に



大堀相馬焼の窯元「明月窯」を先代から引き継ぎ45年。伝統工芸士として、また大堀相馬焼協同組合の元会長として、大堀相馬焼を先導する役割を果たしていた長橋さん。現在は、東京都東雲の公務員住宅に避難し、奥さまと二人で暮らしています。腰を痛めていることもあり、窯元再建の道は見えていませんが、文化センター等が主催する陶芸教室の講師として活躍されています。

◆うれしい支援
震災後、津島に一時避難した後、新潟県栃尾市の『大堀会』から声をかけてもらい、妻と長男と一緒に、車2台で栃尾市を目指しました。車のガソリンが切れ、途中のインターまで届けてもらったり、本当にたいへんな道中でした。栃尾市では、布団や衣類、生活用品などたくさん寄付してもらいました。着の身着のまま避難したので、本当にありがたかったです。その後、東京に住む次男から、自分が住むつもりで購入していたマンションに住まなにか、との誘いを受け、東京に避難し、半年ほどそこにい



◆ひな人形や干支飾り
震災前は、「明月窯」の窯元として職人一人とパートの人を雇い、妻や長男と一緒に毎日忙しく働いていました。湯飲み茶碗や皿とあわせて、ひな人形や干支飾りの製作が盛んになり、人気を得ていました。干支飾りは郵便局の保険加入の景品に採用となり、干支飾りを揃えるために保険に加入したという人もいたようです。伝統を大事にしながら、新しい取組みもしていましたね。長男が跡を継いでくれて営業にも力を入れていた時だったので、震災がなかったらという悔しい思いはあります。

◆陶芸教室の講師として
この頃、江東区の文化センター等で開催される「陶芸教室」の講師として、出かけることが増えてきました。昨年からは、3回の連続講座で、「大堀相馬焼」は、3回の連続講座で、てびねりから絵付けまで行います。同じ施設内に電気窯もあるのですが、定員の20名はすぐに満員になってしまいます。土は、名古屋の業者に頼んで取り寄せています。大堀の土と同じ組成で、工法を守ればちゃんとした「大堀相馬焼」になります。
窯元として事業再開したいのは山々ですが、腰を痛めていることもあり、今年77歳になる私にとつて、一から事業を始めるのはちょっとしんどいです。長男の思い次第になると考えています。
今後のことは、はっきり決められない状況です。妻と二人、趣味のそば打ちや陶芸教室の講師役を楽しみに過ごしていたらと思いますが、一方で浪江に帰れるようになったら、事業を再開したいという思いも変わらずあります。浪江の暮らしに代わるものはありません。



宮城県

小峯 敏秀さん・陽子さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：4月1日

バラバラになった友人・知人と連絡を取り合いたい



▲自宅のリビングルームで

震災前は、設備の会社に勤務していた敏秀さんと、ピアノ教室を約30年営んでいた陽子さん。現在は、宮城県南部の大河原町に夫婦二人で暮らしています。ご自宅は昨年引っ越ししたばかり。ようやく地域に馴染んだところだそうです。

◆失った充実した日々
私(敏秀さん)は、震災前は設備会社に勤務していました。会社とも相談して定年後も70歳まで継続して働くつもりでした。手掛けた設備は、地域の企業の社屋や電力会社の免震棟、学校など浪江町にある主要な建物など。今でも、思い出がたくさん詰まったこれらの建物に思い出が溢れます。ですが、震災によって仕事とやりがいを取られてしまい、残念でなりません。
私(陽子さん)は、自宅でもピアノ教室を開いていました。我が家は息子が2人でしたから、女子の生徒さんは自分の娘のように可愛がりました。夫も子どもが大好きで、ピアノの練習が終わった生徒さんが、夫が会社から帰ってくるのを待っていて、その後一緒に遊んだりしていましたね。生徒さんと共にコンクールを目指して熱中した充実した日々でした。現在は教え子の皆さんから「今度結婚するよ」などと、近況の連絡をいただくこともあり嬉しく感じています。
私(陽子さん)は、浪江に住んでいる頃から地域活動が好きでしたから、現在も隣組同士の活動である清掃やゴミ拾いの行事には積極的に参加しています。他には、岩沼市社会福祉協議会が実施しているサロンに参加して、浪江町民と出会ってお互いに連絡先を交換したりもしました。私たちはたまたまこのサロン開催を知ることができたのですが、他の方は知る機会がないのでないかと心配に思っています。
私(陽子さん)が楽しみにしていることは、同じ合唱サークルに入っている友人と、週に1回福島市で会いおしゃべりすることです。互いの苦労を知っている者同士、気兼ねなく話すこ

◆今後のことは分からない
一時帰宅で、浪江に帰ることができるようになりました。家がネズミに食べられていたり、壊れていたり、戸が開かなくなっていたり。これから直すのも大変でしょう。これからの生活がどうなるかは全然わからないのですが、息子の考え次第かなとも思います。
◆浪江高校の活用を提案
これからのことを考えると、自分も仕事を担当した浪江高校が思い浮かびます。現在は使われていませんが、今後フル活用してはどうでしょうか。1階は幼稚園。2階から3階は老人ホーム、4階は田んぼ作業などをする方向けの憩いの場に。ぜひ、検討してください。
◆お互いに連絡を取り合うために連絡網を
今、特に希望するのは、バラバラになった町民同士が連絡を取り合えるように連絡網があればと思います。友達、お世話になった方などに連絡をしたくても、連絡先が分からない方がまだまだ多いです。イベントなどに参加して連絡先を交換すればいいのですが、人数が多い場所が苦手なので、出歩くのがおっくうなのです。少人数で集い合うためにも連絡網があればいいなと思います。